

2022年9月18日 (日) 14:00 ~ 17:00 (Zoom)

3日目

## 『カウンティング&クラッキング』 翻訳リーディング (後半)

### シャクティダランによる質疑応答

○菅田 本日はお集まりいただきありがとうございました。それでは「国際演劇交流セミナー 2022 オーストラリア特集～自らの言葉で語り始めた難民、国家の神話を語りなおす先住民」、3日目を始めさせていただきます。

(リーディング参加者を紹介)



### ◆『カウンティング&クラッキング』 リーディング (後半)



○菅田 リーディング参加者のみなさん、ありがとうございました。  
これより15分間の休憩を取りたいと思います。

(15分休憩)

○菅田 お待たせいたしました。ではこれより、シャクティダランさんによる、質疑応答に入りたいと思います。シャクティさんの質疑応答に入る前に、リーディング参加者によるリーディングを終えての感想や、この作品に出合っの感想などをお聞きしたいと思います。では順番をお願いします。



○リーディング参加者・小林 様々な分断が行われている今のこの世界で、やはり、演劇の必要性をすごく感じました。演劇で私は世界を平和にできると思っています。この作品に出合えて幸せです。ありがとうございました。



○リーディング参加者・木村 自分が生まれ育ったのとは違う文化の戯曲をリアルに体現しようと試みることに、想像力を使うことがものすごくエキサイティングな体験でとても楽しかったです。これからもずっと考え続けていきたいと思っています。ありがとうございます。



○リーディング参加者・百花 ありがとうございます。私はこの戯曲と出会って、戯曲のなかでもそうだし、この稽古場を通じて、知っている方とも、今回初めて会う方とかスタッフも含めてですけど、ここで出会えたことがとても嬉しかったし、いい経験になったから本当に良かったです。ありがとうございました。



○リーディング参加者・大原 海外戯曲に触れるたびに、その国の歴史や文化背景を知るし、しっかりと向き合う時間があっただけですけど、今回もこの『カウンティング&クラッキング』を通じてスリランカの歴史や難民の問題などと向き合う期間を過ごせて本当に勉強になりました。ありがとうございます。



○リーディング参加者・水野 ありがとうございます。この作品の主人公はシダータなんですけども、同時に女性たち、女性の生き方も描いている作品だと思うので、そういう作品に同じ女性として携わることができたのはとても幸せな経験でした。ありがとうございます。



○リーディング参加者・原田 水野さんも言っていましたけれども、女性が何かを守ろうとする力の強さみたいなものをすごく感じる戯曲でした。アボリジナルのリリーというキャラクターを演じたんですが、単一民族国家と言われることもある日本では、リリーという存在を想像するのが、私にとっては難しく感じました。でも、誰かのバックグラウンドも含めて人を受け入れよう、知ろうっていう私自身のなかにもある気持ちをすごく深く使いながら、リリーという役を演じることができたように思います。感謝してます。ありがとうございました。



○リーディング参加者・佐野 一昨日、シャクティさんが演劇を創るという行為は人間性を取り戻していくことだとおっしゃっていました。今回の取り組みを通じて私も少しだけ人間性を取り戻せたような気がしています。(一同笑う) ありがとうございます。



○リーディング参加者・橋詰 僕もちょっとかぶって……あの、2日前にシャクティさんの話を聞いて、演劇をすることによって見ている方たちを癒していく、これに僕はすごく感銘を受けまして。演劇ってなんのためにやっていくんだらうってたびたび考える機会があったんですけど、これだなと思いました。ありがとうございます。



○リーディング参加者・尾倉 僕はこの作品で、セリフが多くない役をいくつかやったんですが、稽古のなかでその1つ1つの役がこの作品にとって絶対必要である、ちゃんと意味のある、公平に書かれているというのが稽古のなかですごく理解できて。もっともっとこの作品を長く稽古したいなと思いました。上演するときは絶対出たいと思いました。最高でした。ありがとうございました。



○リーディング参加者・小山 この戯曲をリーディングしてみて、すごくエネルギーのある戯曲だなんて思いました。で、これをぜひ日本でも上演できたらいいなと勝手に1人で妄想しているんですけど。今回は全部日本語でリーディングしましたが、実際日本で上演するときに、この戯曲の魅力の1つでもある多言語っていうところを、もし日本人キャストでやったら、どんなやり方があるのかなあと。でもぜひ日本でやりたいし、観客としてこの物語を観ていたとしても、すごく圧巻だろうなと。ぜひ、日本で上演をして、くれ！（一同笑う）



○リーディング参加者・神保 物語の力のいいところは、ドラマとか登場人物を見ることによって、自分とは縁遠い人の立場やものの考え方、いろいろな事情なども理解できるようになるところにすごい力があると思っておりまして、この作品で少し（……遠い方々のことも）多少は理解できたのかなという気もいたします。難民や移民の方々に対する課題がとっても多いこの国なんですけど、そういうところでも気持ちに何か刺激を与えられれば素敵かなと思います。



○リーディング参加者・杉本 この作品に関わる前と関わった後はですね、最近たまに日本でもスリランカのニュースが、大統領を絡めたニュースがあるんですけど、それに過敏に反応するようになりまして、その変化だけでも自分にとっては大きなことだったと思っております。ありがとうございました。



○リーディング参加者・渡邊 最初、この作品を読んで、僕はわからないことがたくさんあった。文化であったり、人物の背景であったり、学ばなければいけないことがたくさんあったんです。最初はこの作品を読んだ段階から、不思議な気持ちなんですけど、すごく身近に感じたというか、自分にも寄り添ってくれているような物語だったので、その先に向き合えたことがとても楽しかったです。そして、僕は是非、日本でこの上演を観たいという思いが強いです。本当にありがとうございました。

○菅田 みなさん、どうもありがとうございます。

## ◆シャクティダランによる質疑応答

○菅田 ではこれから、シャクティさんへの質疑応答に参りたいと思います。Zoomを観ている方でご質問がある方はまず手を挙げてみてください。すぐにはいらっしゃらないようなので、Q & Aにきている質問に行きますね。

○シャクティ その前にフィードバックをお伝えしましょうか。リーディングを観たうえでの感想を述べさせてもらってもいいでしょうか。



○菅田 はい、もちろんです。お願いします。

○シャクティ まず、みなさんがいかにこの作品に思い入れを持って関わってくださったかということが、リーディングを通してはっきりと伝わってきました。オーストラリアではディーブダイブ (deep dive) という言い回しがあります。それは深い水の中に思いっきり飛び込んでいくということですが、みなさんはまさに深いところまで飛び込んでいったと思います。

しかもみなさんは敬意をもって、そして大きな好奇心を持って臨んでくださいました。そのことに対してお礼を言いたいと思います。演劇を通して作品に深く関わることができるということの証しだとも思います。

そして2つ目にお伝えしたいことは、みなさんがとてもうまくキャラクターそれぞれの神髄の部分を把握していたと思ったことです。本当に素晴らしいリーディングを経験させてもらいました。しかも、キャラクターたちの、例えば女性たちの強さとか、シダータの好奇心、ハーサの気高さ、アパの悲劇、そういったものをよく理解して演じられていました。こういったアーキタイプ的なキャラクターたちが融合していったわけです。

しかもそれをみなさんが、日本語で読んでくださることによって、日本語という文脈の中でキャラクターたちが置き換わっていき、それがまた更にもとものスリランカの戯曲に書かれている文脈の中に還元されていきました。本当に素晴らしい交流だったと思います。ありがとうございます。

なじみのある部分と、まったく新しいものを一緒に見ていたので不思議な経験でした

が、それがまた素晴らしいのだと感じました。ありがとうございます。

○菅田 「今回初めてリーディングという形で、この素晴らしい作品を拝見しました。舞台はまだ見てませんが、もしシャクティさんがこの舞台の演出をする場合、最も集中したい場面などありましたら教えてください」という質問です。

○シャクティ 特に結婚式のシーンが興味深いと思っています。なぜなら、今世界中の多くの国々が置かれている状況を反映しているからです。

今、私たちは1つの分岐点に差しかかっています。スリランカは戦争の道を歩むのか、平和を選ぶのかという局面を迎えています。世界の状況を見ると、気候変動や分断、統一といった多くの課題をさまざまな国が体験しています。私たちがこれから歩むべき道は、誰かに選んでもらうのではなく、私たち自身が選ばなくてはならないということテーマにしたいと思っています。

また、日本の状況において、どういった側面に共感が持てて、共感が持てなかったのかということ、是非みなさんと話し合いながら、プロセスとして取り組んでいければと思います。日本の文化、あるいは社会状況によって非常に身近に感じる部分と、そうではない部分があると思います。

187

身近に感じる部分に関しては、どのように表現して演出すればお客さんに身近な問題として深く共感してもらえるか探っていきたいのです。日本人にとってあまり馴染みのないようなことに関しても、演劇の力を通して、どうやったら他文化に対して日本のお客さんに共感してもらえるのか、ということを探っていけるということも、同時進行で行えると思います。

○菅田 ありがとうございます。チャットのほうに来ている質問です。

「わたしはラーダの両親のことが気になって仕方ありません。劇中では、ラストの場面以外ではあまり登場しませんが、特にお父さんは登場していません。ラーダがオーストラリアに移住できたのも両親がいたからで、そういったことを考えると、『カウンティング&クラッキング』に彼らのストーリーを組み込むのがちょっと難しかったとして、彼らのストーリーを中心にした劇を新たに作るという気持ちはあるのでしょうか」という質問です。

○シャクティ そのスピンオフに関しては、わたし自身も着想はしっかり頭の中に入っていて、是非やりたいですし、素晴らしいアイデアだと思います。また、リサーチを通

してある理論を私の中で作り上げました。どんな内容かというと、家族は4世代ごとに循環していくというものです。

1世代目は貧しくても、その子供たちが富を築き上げ、その富をもとにして世界中を旅していく。そして、その次の世代は、前の世代の人たちが作り上げた富をさらに拡大していくか、あるいは富を失ってしまうかということもありますし、富を選ぶかあるいは自分たちのルーツの方に戻るといった選択もあります。いったんすべてを失った後に、4世代目でまた1から始めるというふうに循環するのです。

補足をすると、ラーダの両親たちは世界中を回って好きなことをしていました。それとは対照的に、ラーダはスリランカを出たくなかった。でも、状況が無理やり彼女を国から追いやってしまったわけです。

西洋の多文化国家の多くでは、難民や移民の人たちは経済的な理由のみでやって来たと思われがちです。それが定説になってはいますが、実際は必ずしもそうではなく、人によっては極端な状況によって無理やりそうせざるを得なかった人たちもいる、ということを表しています。ラーダと彼女の両親たちはそういった意味で対照的です。

○菅田 ありがとうございます。次の質問に移りますね。

「タミル系の伝統音楽と舞踏ができる俳優を探すのは難しかったですか。また、オーディションで16人の俳優さんを選んだそうですが、何人ぐらいの中から選んだんでしょうか。俳優さんを選ぶにあたって、最も大切にしたい点はどういったところですか」といった質問です。

○シャクティ 質問に対する答えですが、キャスティングに関しては、数百名の候補者にインタビューし、4年がかりのプロセスだったので、とても疲れました。

日本のコミュニティがどういう状況なのかわかりませんが、スリランカのタミル系の人たちとインドのタミル系の人たちは同じ言語を共有しています。そして、タミル語を使う人たちの間では、若い頃から伝統舞踊や伝統音楽など、自分たちの伝統的文化のものを身に付けたり、触れる機会が必ずあります。特に女性はバラタナティヤムという伝統舞踊を経験している人が多くいます。

ですから、そういった意味で伝統舞踊や音楽ができる人たちを探すことは難しくありませんでした。しかし、この作品のキャスティングにおいては、一切、手を抜きたくな

いと思っていました。特に若いラーダは大変な役です。彼女は伝統舞踊を踊りながら同時に演技もしなければならないので、両方兼ね備えている人がなかなか見つかりませんでした。

キャスティングに関して、基本的な条件が揃っている人たちはたくさんいました。でもそれだけでは不十分で、人柄も重視しました。基本的な条件というのは、特定の言語を話せることや年齢層といったことなのですが、俳優としてのタイプという面も見ていきました。

同時に彼らはアンサンブルとして一緒に芝居を作っていくことが求められるので、相手の話をよく聞く、聞き上手であることや、共同作業が必要なので、謙虚さも条件になっていました。

私たちはこの作品を作るプロセスのなかで、多くのディスカッションを積み上げてきました。そのため、相手を論破しようとかではなく、きちんと話を聞いてニュアンスまで汲み取って理解することが資質として求められたわけです。

何が正しく何が正しくないのか、そういったことの話し合いではありません。このプロセスのなかで、この劇がなかったら集まることはないだろう、と思われる人たちが一緒に共同作業することによっていろんなことを学んでいきました。

また、演出に関しては、ただ俳優として自分たちの役を演じるだけではなくて、例えば、セットなどもリアルなものを作ったわけではなく、いろんなシーンに当てはめられるようなものだったので、部分部分の小道具などを動かしながらそのシーンにふさわしい形にしていく必要がありました。例えば、アパートの窓や、スリランカの屋敷の玄関などは俳優自身が作っていったのです。そういったことをやるのを厭わない人たちが必要でした。

例を挙げると、ニヒンサ役の俳優ですが、最初は彼女の母親が絶対にこの作品には出ないでほしいと反対したそうです。タミル人のことなんか、あるいはタミル人の作家が書いたような戯曲を信じてはいけないと言われていたのですが、その俳優は戯曲を読んでものすごく気に入って、強い想いを持って取り組みました。

戯曲のなかに書かれている1983年に何が起こったかは、スリランカの学校では教えていません。封印された歴史となっていますが、この戯曲を通して初めて知ったそうです。彼女はいまスリランカで起こっている様々な抗議活動に毎日のように積極的に参加して

います。この作品に参加する前とは全く違う態度を取るようになりました。

このように、自分を大きく変えるような戯曲に取り組むことを厭わない人たちがキャストとして必要でした。

○菅田 ありがとうございます。それでは、この辺りで、通訳のお2人にお話をうかがいたいと思います。まず由良さんからお願いします。由良さんは今、オーストラリアに住んでいらっしゃるようですが、日本からオーストラリアに移った立場として、この作品をどのように感じていらっしゃるのでしょうか。

○通訳・由良 そうですね、私は日系オーストラリア人で10歳の時に家族と一緒にオーストラリアに移住をしたので、自分を1.5世と呼んでいます。若い時に来ると、1世や2世とは全然違う独特な経験をするので。

こういう『カウンティング&クラッキング』のような劇が、シドニーで上演されるということは、私たちのコミュニティーの日系オーストラリア人、またアジアン・オーストラリアンのコミュニティーにとってはとても大きなことです。やはりこういうストーリーはめったに伝えられないんですね。でもこの5年ぐらいでいろいろ変わってきて、こういうストーリーが徐々に増えてきました。

特にシャクティさんが書かれた『カウンティング&クラッキング』が2019年に上演されて以来、ほかの移民者や難民者の話、マイノリティーの人たちのストーリーもいろいろと声が大きくなってきたので、いま、私たちが住んでる中でももっとも歴史的な時期だと思います。

後、同じ移民者でも日系人としてしか経験できていないこともいろいろあるので、ストーリーの中で似ている部分や違う部分などを色々見ながら感じたりとか、考えが変わったりとか、共感したりとか。そういう意味ではオーストラリアに来たアジア系移民者としてこの劇の大事さを非常に強く感じています。

○菅田 ありがとうございます。では、角田さん、お願いします。

○通訳・角田 この戯曲を読んでもものすごくパワフルで圧倒されました。

私自身は幼少期に1年ぐらいオーストラリアに住んでいたのですが、その頃はギリシャ系やイラン系の移民が多くて、黄色人種はあまりいなかったせいか、よくいじめられ

て、差別されたという苦い記憶が残念ながら強く残っています。

しかし、大人になってから、オーストラリアの無人島でインド系イギリス人が率いるプロジェクトの一環としてワークショップに参加しました。オデッセイアというギリシヤの長編叙事詩を新たに作るという企画で、参加者のなかには、南インドのケララ州の俳優、アフリカ生まれイギリス育ちのインド系の演出家と俳優以外にアボリジナルの俳優も2人いて、その時、彼らが語りの文化について教えてくれました。

焚火を囲んで短い話を語っていくという形を取っていたのですが、同じく参加していた日本人の俳優が九州出身だったので焚火で炭坑節を歌い出したら、アボリジナルのバンバという俳優がその歌を知っているって言ったのです。なぜかというと、捕鯨業が衰退した後、和歌山県の太地というところから多くの日本人がオーストラリアのブルーム（Broome）という町に移り住んでいて、彼の養父が日本人だったので、養父がよく歌っていたということだったのです。

そういったことも知りまし、アボリジナルの間で大きな物語を共有していて、各部族によってその断片を持っている。それをいつかはつなぎ合わせて1つの大きなストーリーを語るのだ、というようなことを言っていたのを思い出したのですが、それは多分この戯曲に書かれている、ザ・ドリーミングなのかなと思いました。要するにこういった神話や過去にさかのぼる物語によって、みんなが繋がるのだということを思い出させてくれました。

あと、この戯曲にある水が合流するというくだりのように、結局、タミル人とアボリジナルも繋がっていたかもしれないし、私が体験したように、日本人とアボリジナルの人たちが繋がっていたということによって、本当に大きな宇宙のなかでわれわれ人間は小さな存在なのに、それぞれがちょっとした違いや差だとかで争ったりにらみ合ったりということはとてもむなしく思えたりする。そういう距離感を持った、客観的な視点を持つこともできるのかもしれない。

でも、その前にそれぞれに置かれている立場をしっかりと知るということは、ちゃんと語って、聞くということ。そうすることによって、多様な人たちが違いを認め合いながら共存していくのではないかという可能性が、なんとなく読んでいるうちにトンネルの先の光のように見えてきました。

○シャクティ 私もそのように思います。



192

○菅田 ありがとうございます。では、リーディングに参加してくれた方々のなかで、シャクティさんに質問があったらどうぞ。

○リーディング参加者・水野 アパとラーダがそれぞれ違う場面で「 $1 = 0.99999$ ……」というセリフを言っていますが、すごく重要なセリフだと思うんです。このセリフの概念をこの戯曲に入れた意味について知りたいです。なにかシャクティさんからのメッセージがあるような気がしました。

○シャクティ まず、 $1 = 0.99999$ ……という方程式は、ものすごく美しいと直感的に思ったというの也有ります。0.9の9が続けば続くほど、ますます1に近づいていく。同時にそれが無限大であり、でも決して1にはならない。決して埋まらない隙間が必ず残ってしまう、という部分も表しています。ゴールを目ざしていくその過程のような数字、概念のように感じました。

私たちはなにかの目的地に向かっていきます。でもその目的地自体が目標ではなくて、その過程、プロセスこそが人生なのだと思っています。

○菅田 ほかには何かありますか。

○リーディング参加者・尾倉 くだらない話でいいですか。僕はアベンジャーズが好きなんですけど、ディズニープラスの『ミズ・マーベル』をご覧になりましたか。というのも、パキスタンの移民2世のお話で、つい最近のドラマなんですけど、すごく『カウティング&クラッキング』に似てる気がして。でも年代で言うと、マーベルが『カウティング&クラッキング』をパクったんじゃないかって思ったので、ご存じかどうかお聞きしました。

○シャクティ まだ観ていないです。ぜひ観て確認しますね。アドバイスありがとうございます。

○菅田 パネリストの方々からも質問やシャクティさんにおっしゃりたいことがあったら、画面をオンにして出てきていただけますか。では、待っている間、こちらの会場ではいかがですか。

○リーディング参加者・佐野 戯曲の話で、ラーダとティルーのふたりだけ、若い時と20数年後とで演じる俳優を分ける設定になっていて、2004年のラーダが過去の、当時を回想するとか。そういう作りにするに至った経緯であったり、理由や、もしあれば狙いであったりを教えていただきたい。自分が今回はハーサンガをやった時20代の時と40代の時と相手役、ラーダやティルーが、俳優さんが変わるって体験をして、特にそれを思いました。

○シャクティ 若いラーダと現在の年を取ったラーダ、つまり20数年後のラーダが出てくるわけですが、現実の世界ではできないことが演劇を通してならば可能です。それは時系列を崩す、ということです。順番を入れ替えることができます。

若いラーダが出てくる最後のほうで、スニルが家を買いたいというくだりがあります。そして最後のほうで「どちらに行かれるのです？」と若いラーダに聞きます。その質問の後、若いラーダから20数年後のラーダにバトンタッチされるのですが、これは素晴らしい魔法のような瞬間だと思っています。なぜならば、演劇を通して異なる時間と異なる国の差異を消すことができるからです。

イーモンがこの作品の演出家であり、共同で戯曲を書いてくれました。彼はベルボアの芸術監督でもあり、私たちは長い間、密接に影響し合いながら、この作品を創ってきました。2人でどこかの場面で時間が融合するような瞬間を力強く描きたいと話していました。そして、過去よりも今と未来の方が重要なのだということをメッセージとして伝えたいと思っていました。

現在も未来も同居していて、同じなのだということを言いたかったわけです。そのために、演劇のなかでの奇想天外な発想なのかもしれませんが、5行だけ、時空を越えて、同じ人物が同時に舞台上に登場するという場面を作り、若いラーダと、何十年後のラーダが同時に存在するというシーンが生まれました。

ラーダという人物は、昔と20数年後では全く別人物というぐらい変わってしまいました。昔の彼女は非常にオープンで誰とでも打ち解けるような人だったのですが、あまりにも、スリランカを去るということが苦しくて、自分の気持ちを封印してしまったわけです。

同じようにティルーも21年間監獄のなかに入れられてしまって心を閉ざしていました。不当な理由で気持ちを閉じ込めてしまったわけですが、そういった関係のもとで同じ人物でも変わっていくということを描きたいと思っていました。

2人のラブストーリーに焦点を当てるということも目的だったわけですが、全く異なる観点で、演出をすることもできると思います。例えば、僧侶とか別な人物に焦点を当てて、彼らの変化を描くということで、全く違う類型的な人物像ができるのではないかと思います。

○**リーディング参加者・佐野** ありがとうございます。僕は2人のラーダが一緒にいるシーンが大好きです。

○**菅田** 先ほど実行委員・公家さんが画面に出てきてくれたんですが……、お願いします。

○**公家** この企画に実行委員として参加させていただいて、言いたいことがたくさんありすぎてなかなか一言では言えないんですけど、1つだけ質問があります。僕も翻訳劇を演出することが多いものですから。僕が学んできた演劇は理想を語っていく、大きな物語というのかな、理想を語る演劇が、ある時代とともに終わり、今、どうしたらいいんだろう、どんな演劇をやったらいいんだろうっていうときに、僕も構造主義の哲学に出会いました。

この作品ではボードリヤールの思想があちこちに散りばめられている。ボードリヤールの言葉って、ある時代の預言書のような本なんだけれど、この作品のなかではそれを武器商人のスニルが引用して「この時代は幻であり、ゲームだ」なんてことを言う。そうするととても恐ろしい気持ちになるっていうか、西洋思想がそもそも終末論的なもの

が多くなっていく中で、この作品は、最終的には幻じゃなくて、お父さんも生きているし、シダータにもこれから新しいなにかが始まっていく、というようなことがとっても素敵だなんて思いながらこの作品と向き合っていました。

そこで質問ですが、『カウンティング&クラッキング』というこのタイトルですけど、アバのセリフのなかにあるんですね。僕はアバという登場人物は、まるでチャーホフの作品に登場する人物であるかのような悲しみを感じる人物だと思いながら読んでいたんですけど、その彼が語る長いセリフの捉え方がとても難しいっていうか、じゃあどうすればいいのとなる。

民主主義っていうことを考えていくときに、小さな集団ではできるようなことが、大きな集団になるとなかなか難しいっていうことに必ずぶつかるんですけど、アバの言葉にこの作品のタイトルを込めたシャクティさんの思いというか、メッセージというか、そのことはとてもお聞きしたいと思っていたところでした。すみません、長くなりました。

○シャクティ アバが民主主義について、タイトルでもあるカウンティング&クラッキング、「ある範囲の内で頭数を数えること、しかし、その範囲を超えた数は割ってしまうこと」というセリフですけど、これは実際、私の曾祖父が手紙に書き記した言葉で、コロomboでリサーチしたときに叔父の1人を見せてくれました。スリランカで叔父と一緒に曾祖父の手紙を互いに読み合ったのですが、そのときにこのフレーズを発見しました。

そしてこのフレーズ自体が、タミル人が経験している闘争や争い、そして多くの世界中の少数民族の人たちが経験している闘争を1つの言葉に言いまとめていると思ったのです。ですから、このステートメントがちゃんと成り立つようにしなければならないと思いました。そしてこの戯曲全体はある意味では、今は亡き曾祖父の亡霊への手紙での返答だと思っています。彼の発言をちゃんと立てて正当化するための作品です。

このフレーズの前半ですが、私はこのように解釈しています。私たちはある作られたシステムのなかで機能しています。システム、あるいは体制というものは私たちを社会のなかで守ってくれるだろうという前提で、私たちはそれを当てにしています。なぜならば、人というものは心の奥底では自分たちは守られていて、平等で安全なのだというふうに思っているからです。

後半部分はこのように解釈しています。もし私たちが、社会が作り上げたシステムがもう当てにならないという立場に置かれたら、私たちは自分自身の安全であったり、自分たちを守るために、守りに入らなくてはいけません。これはいやでもそうせざるを得な

いのです。それが人間としての基本的な権利であり、私たちの基本的な尊厳を守る術としてそうせざるを得ない。もはや、社会が守ってくれないと分かった時に、自分たちの基本的な人権を守るために立ち上がらなくてはならない。

でもそういう行為の結果、思いもよらない結果が生まれるかもしれない。例えば暴力です。それが一巡して私たちは結局、既成の民主主義というものは存在しないというふうに思わなくてはならないということがわかります。民主主義というものは、毎日私たち自身が一緒に連れて歩かなくてはならない。

そしてその一部たりとも不足してうまく機能しなくなったときに、とてつもない悲惨な結果が生じることがあるわけです。そこで私たち自身が、その民主主義という体制自体をよりよくするために働きかけるのか、それとも、守りに入って自分たちの自己防衛という手段をとるのか、ということを決めなくてはならない。つまり、どこかで線引きをしなくてはならないわけです。

私たちは現在、世界の歴史のなかでもものすごく複雑な状況に置かれています。そしてこの作品を観て、1人1人が自分たちの置かれている立場や状況に応じて別の答えを見つけだしてもらえたらいいなと思っています。

○**公家** ありがとうございます。ハッピーエンドのようだけれどもまるで矛盾が解決していないこの作品が大好きです。

○**シャクティ** その通りです。

○**菅田** 質問もたくさん来ていますが、だいぶ時間が迫ってまいりました。しゃべり足りない方もまだいると思いますが、お時間となってしまいました。本日は最後までお付き合いいただきまして、本当にありがとうございます。

この3日間のオンラインセミナーいかがでしたでしょうか。アンケートは終了後に送付いたしますので今後の参考のためにぜひご協力をお願い申し上げます。